



事例
1
東北大学

全学部横断の基礎ゼミで 研究大学型少人数教育を実践

橋本 鉦市 東北大学 教育学研究所 准教授

新入生のほぼ全員に160以上もの学部横断的な課題の中から希望するテーマを選択させ、20名以下の少人数のゼミごとに参加・体験型のフィールドワーク・実習を主体とした学習・調査を通して、これまでの受動的な知のあり方から自分たちで課題を探求するという新たな「学び」のスタイルを会得させる、これが東北大学の初年次教育である「基礎ゼミ」の目指すところである。

この授業形態は、平成13年度に試行的に開始され、翌年度から本格的に展開されることになったが、今では本学の初年次教育の「目玉」にまで成長してきている。開設から6年しか経ておらず、また単位数も2単位にすぎないが、平成18年度には文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に採択されるなど、内外でその教育実践は高く評価されている¹⁾。

ただ、開設当初から今ある形態が定められていたわけではない。「基礎ゼミ」という名の下での少人数科目の経緯は短いものの、昭和61年からはじまる前史から数えて20年、その間の様々な実施体制の改編や教育内容の改善を通じ

て、全学教育関係者らが精錬してきた教育形態であると言ってもいい。開設当初、この基礎ゼミの開講数は48課題にすぎず、しかも新入生全員に課された必修科目でもなかった。しかし、現在では全部局から開講数は163課題にまで達し、また実質的に10ある学部の1年生2500余名ほとんど全員が受講するに至っている(5学部で必修科目、5学部で選択科目)。基礎ゼミの立ち上げから関わってきた齋藤絃一名誉教授の言を借りれば、基礎ゼミはいまや東北大学全体のコンセンサスを得た大学教育の中核(コア)科目として位置づけられるようになったのである(資料④、16頁)。

本稿では、学内関係者として、高等教育研究に携わる一人として、また実際に4年間にわたってこのゼミを担当してきた一教員として、この基礎ゼミの導入の背景、全学教育における位置づけ、仕組みと特徴、運営体制などを紹介し、その成果と今後の課題をレビューしてみたい。

文系理系混合の基礎ゼミがスタート

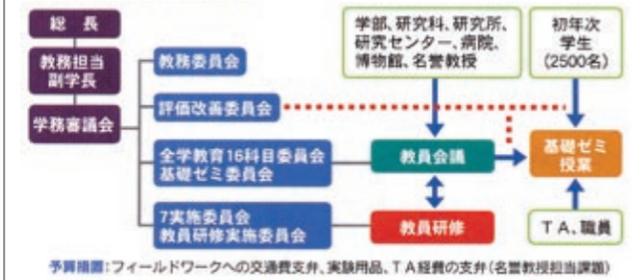
基礎ゼミが採る少人数ゼミという形態は、昭和61年度か

ら各学部で開講された「専門導入科目プレゼミ」にその原型を求められることができる。このプレゼミは、1~3単位の自由聴講科目であり、受講対象は当該学部の1年生を優先としていた。

平成3年のいわゆる大綱化によって本学でも教養部が廃止され、これまでの一般教育は全学の責任と参加によって運営されることになり、該当する科目群は「全学教育」科目へと変更された。この全学教育カリキュラムの企画・調整・実施には、大学教育研究センターおよび各学部・研究所から指名された委員による全学教育審議会や全学教育実施計画委員会、教務委員会などが当ることになったが、入学生については、先のプレゼミを原型とした「転換教育科目A・B」群が設定され、大学教育へのイニシエーションの役割が期待された。しかし、各学部所属学生を対象とした「転換A」は専門教育の色彩が濃く、また所属学部を問わない学部横断型の「転換B」も受講希望者数に比べて開講数は少なく、少人数とはいえ100名を超えるクラスが存在して学生に不満が募っていることが明らかとなり、その改善の必要性が指摘されるようになった。

一方、東北大学は「研究大学」としての方向性を明確に打ち出し(平成11年2月、評議会承認「東北大学の在り方に関する検討委員会報告」)、全学教育についても研究大学として大学教育を取り巻く環境、情報化、国際化といった社会変化に対応することが最重要課題であるとの認識から、平成11年2月開催の評議会において全学教育改革検討委員会の設置が決定され、根本的な改革に着手されることとなった。同検討委員会は、翌12年4月に、全学教育の目的を自立的研究者・高度職業人などを育成する専門教育・大学院教育展開のための根幹的な基盤教育を行うものとして位置づけるなど、研究志向的な方針に沿った形で設定した(東北大学「全学教育改革検討委員会報告」)。その中で、全学教育の目的を達成するためには少人数教育が最も効果的な教育形態の一つであることが再確認され、特に「全学部の新入生を対象にした全学教育による少人数教育」の整備と対策が強く指摘され、少人数教育の科目名を「基礎ゼミ」と名付けて、その具体的方法(学生の振り分け、担当教員の選出方法、単位の性格、教室の確保等)について検討するための「少人数教育(基礎ゼミ)プロジェクトチーム」が結成された。同チームは、平成12年3月、これらの検討事

図表1 基礎ゼミ実施・支援体制



項について具体案をとりまとめ、他の全学教育改革案とともに最終的に評議会承認されて(同年4月)、基礎ゼミは大学全体のコンセンサスの下で実施に移されることとなったのである。

200名の担当教員とTAによる体験型授業

さて、基礎ゼミは平成14年度からの全学教育カリキュラムの大幅改訂に対応して、同年度から本格実施されたわけだが、運営についての問題点および対応策を検討するため、まず平成13年度に「転換B」の中で開講数を約3割に縮小した規模で試行的に実施された。その後、実施体制が整備され、現在では各部局から選出された委員から成る学務審議会のもとで、同審議会に設置された基礎ゼミ委員会が必要な企画・調整を行い、全学的支援のもとで実施されることとなった(図表1参照)。以下では、具体的な内容、手続きについてみておこう。

各学部・研究科をはじめ附置研・各種センター・病院に至る学内の「全部局」が、基礎ゼミ担当の教員をそれぞれ一定数出すことになっている(退職教員にも非常勤として担当をお願いしており、平成19年度では200名近くエントリーされている)。毎年担当教員を変更する部局もあれば、数年間同じ教員が担当する部局もあり、各部局の判断に任されている。また大学院生らのTAの活用も開始されている。

教員のシラバスの作成に当たっては「作成要綱」が配布され、その項目として授業の目的・概要、成績評価方法などはもちろんのことだが、学習目標の項目について2原則が明示されている。すなわち、①受講者の達成目標を明らかにするために、学生にとってどのような学力、知識が身につくかを明確にする。②授業担当者側ではなく、受講する学生の視点に立った目標(=学習目標)となるように、文章の主語を学習者となる形で叙述する。シラバスの意味から

すれば、これらの指示は当然のこととも言えるが、基礎ゼミは新生が初めて大学の授業に接する科目と言うこともあって、課題・内容の説明など明確な作成が要求されている。このシラバスはフォーマット化され、そのまま全学教育のホームページで公開され(<http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku.html>)、いつでも閲覧できるようになっている。

教員の課題設定については、教員と学生および学生相互間でface to faceのコミュニケーションを作ることを一つの目標としているため、研究室でのゼミ、体験学習や実験、野外での調査・観察などをできるだけ取り入れることが推奨されている。教員は一人で担当することもあれば、一つの問題を種々の角度から横断的に考える態度を養う意味で、2～3名からなる複数教員が担当する課題もある。開講時間帯は、他の科目とバッティングしないように、第1 Semesterの月曜日3、4、5講時か、木曜日の5講時と決められている。なお、この時間帯ではなく集中講義として開講することも認められており、教員が所属する研究科の実験室やマルチメディア棟などの教室を利用したり、また夏期休業の直前あるいは期間中に附属研修所などで合宿(1日6回分相当で約2日半を想定)を行う課題もある(課題例:図表2参照)。

新生には、大学入学前に「基礎ゼミ履修の手引き(シラバス)」が送付され、それを参考に受講を希望する課題を第5希望まで選択させ、「希望届け」(マークシート)に記入、入学手続きの際に提出させる。この「希望届け」をもとに、学内で共同開発されたコンピュータソフトによってクラス分けを行い、その結果は4月中旬にキャンパス内の掲示板に発表される。

こうしてゼミが開始されると、新生らは、多くの場合、いくつかのグループに分けられ、グループごとに教員が示す課題の学習・調査・分析・実験・フィールドワークなどを

図表2 基礎ゼミ課題例 (平成18年度)

課題名	担当者	学部数	形態
人類と病原微生物との攻防	医	9	実習
環境と化学	名誉教授	8	実験
自分のルーツを探る	東北アジア	8	調査
白血病及びリウマチを知る	病院	8	実習
くすりを知る	薬	7	実験
生と死の境界を歩く	文	7	野外
25年後わたし達は何を食べているか	生命科学	7	演習
来たるべき宮城県沖地震に備えて	工	6	演習
授業プランをつくろう	教	6	合宿
大地のうごきをさぐる	理	6	実験

進めていくことになる。その成果は、それぞれのゼミの中で発表・報告することとなるが、これとは別に口頭ならびにポスター発表する機会が設けられており(平成16年度から、9月末に開催されている(口頭発表は1件5分間、ポスター発表は掲示期間1週間)。この公開発表への参加は各学生の自由意志によるが、司会・進行など発表会の運営も学生が主体となっている。平成18年の実績としては、口頭発表が21チーム54名、ポスター発表が15件であった(図表3参照)。

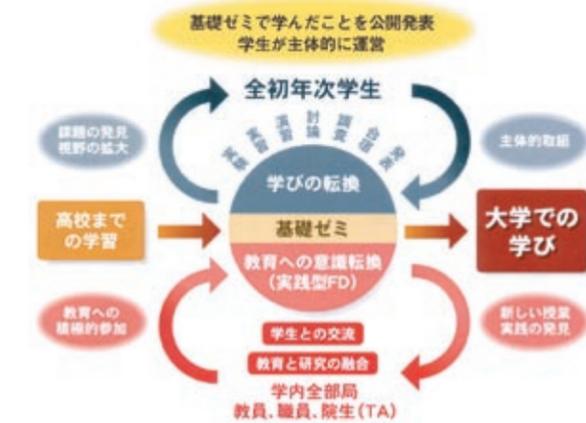
教員にとって基礎ゼミは実践型FD

基礎ゼミに限らず、本学の全学教育はすべて学生による授業評価が実施されている。これらは集計・分析を経た後、教員の手元にその結果が届けられ(全学教育の平均値が併記)、さらに各教員は学生らの評価項目や自由記述を確認した後、これらに対する意見ならびに改善方策を再び学務審議会(評価改善委員会)に送付する。第1 Semesterに開講される基礎ゼミの場合、7月の終わりに授業評価を行い、10月半ばにその結果が届けられる。また、学務審議会ならびに高等教育開発推進センターが主体となり、毎年11月に基礎ゼミ独自のFDが開催されている。このFDでは次年度の基礎ゼミ担当教員を対象に、センターの教員から全学教育ならびに基礎ゼミの趣旨や実施要綱、初年次学生への対応などが説明されると同時に、これまでの実際にゼミを担当してきた教員から、その内容と進め方などについて2課題ほど事例紹介され、教員のスキルアップと相互理解に繋がっている。

FDで配布される基礎ゼミ担当教員の感想などを見ると、大方の教員は基礎ゼミのあり方に肯定的であり、授業の進め方には様々な苦労があったことは認めつつも、結果としては学生の授業への取組みのまじめさや熱心さに満足している。難しい専門分野を1年生に噛み砕いて説明する、他学部学生から全く想定していないような質問を受ける、など自身の研究にもインパクトがあったと答える教員も少なくない(資料⑤)。

一方、学生側の評価であるが、17年度の評価結果から抜粋すると、受講学生の全般的な評価は次の通りである(括弧内は全学教育科目全体の平均値)。

図表3 基礎ゼミ発表会



[授業に興味を持てたか「持てた」+「やや持てた」]=84.0% (67.3%)
 [教員の熱意を感じたか「感じた」+「やや感じた」]=80.5% (71.0%)
 [満足できる内容だったか「満足」+「やや満足」]=76.4% (64.6%)
 [総合評価]「非常によい」+「よい」=81.2% (69.9%)

基礎ゼミが新生に(他の全学科目よりも)高く評価されていることがわかるが、それは「文系なのに実験することができたのは貴重な経験だった」、「自分の視野が広がった」、などの肯定的な自由記述欄のコメントにも表されている(資料①参照)。

研究につながる「大学の学び」へ転換をはかる

以上、東北大学の初年次教育の基礎ゼミの概略を紹介してきたが、その特徴は全部局教員の出勤、学部を越えた専門横断性、少人数システムなどであり、またその期待されている役割を一言で言えば、「受験中心の受け身の学び」から「大学での研究につながる自発的な学び」への転換装置である。この初年次の知の転換が、専門学部や大学院などに進学した後どのようなインパクトであったのかなど、ゼミ受講数年後の教育効果に関する調査分析も必要な時期に来ていると思われるが、現在のところ、教員・学生双方に高い評価と効果をもたらしていると言えるだろう。

今後の展望としては、19年度はTAを含む人的な基盤整備、ベテラン教員によるアドバイザー制度の導入、教員・TA・学生による相互啓発的なワークショップ型のFDなどが、また20年度以降には優れた実践例のウェブ上での公開の実現、基礎ゼミの成果として現れた多彩な教育方法の全

学教育への導入・波及が計画されている。

さて、本学が「研究中心大学」、「指導の人材養成」をミッションや教育理念として掲げていることからすれば、この初年次教育によって、専門教育・大学院につながる第一歩として研究的な学びのスタイルを早い段階から内面化させることは効率的かつ正統的な方策とも言える。しかしあらためて考えてみれば、多分野にわたって160以上のテーマを揃え、そこに担当教員を毎年実質200名もつぎ込み、20名に抑えた少人数のエリート的なゼミ運営が可能なのは、総合研究大学ならではの強みであることは疑いがない。ただこうした体制は他の研究大学では十分実現されておらず、基礎ゼミならびにGPの実質的な責任部局である高等教育開発推進センター長の荒井克弘副学長の弁によれば、「東北大学としてのオリジナルなスタンス」であり、また「研究総合大学としての覚悟」の問題であるという。

こうした研究大学としての全部局的な知の転換の在り方と手法を、今後とも成功裏に推進して行くには、教員側が新生の「知の転換」を促す仕組みや授業の進め方について常に意図的かつ挑発的でなくてはならない。また、学生側も先端的な研究に対する嗅覚と志向をある程度持ち合わせていなくてはならない。そして大学側も担当教員には初年次教育の意義と教員のスキルアップを、FDなどを通じて不断に周知・徹底させる必要がある。その意味で、本学の基礎ゼミは研究志向的な学生—教員—大学との間の、絶妙なバランスの上に成り立っているとと言えるのである²⁾。

引用文献・資料

- ①東北大学学務審議会評価改善委員会「平成17年度 学生による授業評価 アンケート実施結果報告書」
 - ②東北大学「平成19年度 転換少人数科目・基礎ゼミ履修の手引き(シラバス)」
 - ③東北大学教育・学生支援部教務課「平成19年度 全学教育授業担当教員必携」
 - ④東北大学高等教育開発推進センター編「『学びの転換』を楽しむ—東北大学基礎ゼミ実践集—」2007年東北大学出版会
 - ⑤「基礎ゼミ担当教員の感想」平成17年度 東北大学全学教育教員研修(FD)-基礎ゼミ-
 - ⑥東北大学「『学びの転換』を育む研究大学型少人数教育」パンフレット
- 1) 東北大学では、すでに平成17年から同様の特色GPとして「融合型理科実験が育む自然理解と論理的思考」が採択されており、理科系全学部の1年生1800名(19年度から文科系の一部も)を対象として展開されている。
 2) 平成16年に設置された「高等教育開発推進センター」は、高等教育開発部、全学教育推進部、学生生活支援部から成り、70名近い教員スタッフを擁し、基礎ゼミをはじめとする全学教育のみならず、本学の学生の修学・自己開発・進路選択全般にわたる支援組織としての活動が、今後さらに期待されている。